

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四糸金吾殿御返事

ぼんのうじょう こと

（梵音声の事）

新版
1523
〜
1529

しじようきんごどのへんじ ぼんのんじよう こと

四条金吾殿御返事（梵音声の事）

ぶんえい ねん がつ さい しじようきんご

文永9年（'72）9月 51歳 四条金吾

そ せい かんこう もう おう ちらさき 好 きたま そ

夫れ、斉の桓公と申せし王、 紫をこのみて服給いき。楚

そうおう おう によ こし 太 憎

の莊王といいし王は、 女の腰のふときことをにくみしかば、

いっさい ゆうじよ こし 細 がし 者

一切の遊女、 腰をほそからせんがために、 餓死しけるもの

多 いちにん この わ こころ 合

おおし。 しかれば、 一人の好むことをば、 我が心にあわざ

ばんみんしたが おおかせ そうもく 靡

れども、 万民随いしなり。 たとえば、 大風の草木をなびか

たいかい しゆる 引 かぜ 随

し、 大海の衆流をひくがごとし。 風にしたがわざる草木は、

折 失 しょうが たいかい 納

おれうせざるべしや。 小河、 大海におさまらずば、 いずれ

納

こくおう もう

せんじよう

のところにおさまるべきや。国王と申すことは、先生に

ばんにん

だいかい たも

てんち

しよじん 許

たま

万人にすぐれて大戒を持ち、天地および諸神ゆるし給いぬ。

だいかい くどく

す

こくど

さだ

ににん

その大戒の功德をもちて、その住むべき国土を定む。二人

さんにんとう

おう

ちおう

てんのう

かいおう

さんのうとう

三人等を王とせず。地王・天王・海王・山王等、ことごと

らいいん

ひと

守

こくちゆう

く来臨してこの人をまぼる。いかにいわんや、その国中の

しよみん

だいおう

そむ

諸民、その大王を背くべしや。

おう

あくぎやく

おか

いち

に

さんどとう

この王は、たとい悪逆を犯すとも、一・二・三度等には

そう

だいおう

べつ

しよてんとう

みこころ

かな

左右なくこの大王を罰せず。ただし、諸天等の御心に叶わ

いちおう

てんぺんちようとう

諫

じかぶん

ざるは、一往は天変地天等をもちてこれをいさむ。事過分す

しよてんぜんじんとう

こくど

しやり

たも

だいおう

れば、諸天善神等、その国土を捨離し給う。もしは、この大王

かいりき 尽

ごきた

こくど

亡

の戒力つき、期来って国土のほろぶることもあり。また

ぎやくざい おお

重

りんごく

やぶ

ぜんあく

逆罪多くにかさなれば、隣国に破らるることもあり。善悪

っ

くに

かなら

おう

したが

に付いて、国は必ず王に随うものなるべし。

せけん

ぶつぼう

ぶつだ

ぶつぼう

世間かくのごとし、仏法もまたしかなり。仏陀すでに仏法

おうぼう

ふ

たも

しょうにん

けんじん

ちしや

を王法に付し給う。しかれば、たとい聖人・賢人なる智者

おう

ぶつぼうる ぶ

のち

なれども、王にしたがわざれば、仏法流布せず。あるいは後

る ぶ

はじ

かなら

だいなんきた

には流布すれども、始めには必ず大難来る。

かにしか おう

ほとけ

めつごし ひやくよねん

おう

けんだらこく

迦貳志加王は仏の滅後四百余年の王なり。健陀羅国を

たなごころ

握

ごひやく

あらかん

きえ

ばしやろん

掌のうちににぎれり。五百の阿羅漢を帰依して婆沙論

にひやつかん

造

こくちゅう

しようじよう

くに

二百巻をつくらしむ。國中すべて小乗なり。その国に

だいじようひろ

ほっしやみつたらおう

ごてんじく

したが

大乘弘めがたかりき。発舎密多羅王は五天竺を随えて

ぶつぼう

うしな

しゆそう

くび

斬

たれ

ちしや

かな

仏法を失い、衆僧の頸をきる。誰の智者も叶わず。

たいそう

けんおう

げんじようさんぞう

し

ほつそうしゆう

たも

たま

太宗は賢王なり。玄奘三蔵を師として法相宗を持ち給

たれ

しんか

背

ほつそうしゆう

だいじよう

いき。誰の臣下かそむきし。この法相宗は、大乘なれど

ごしようかくべつ

もう

ぶつきようちゆう

大

禍

み

も、五性各別と申して、仏教中のおおきなるわざわいと見

げどう

じゃほう

過

あくほう

がつし

しんたん

えたり。なお外道の邪法にもすぎ、悪法なり。月支・震旦・

にほん

さんごくとも

許

つい

にほんこく

でんぎようだいし

日本、三国共にゆるさず。終に日本国にして伝教大師の

みて じゃほうとど おお 禍

御手にかかりて、この邪法止め畢わんぬ。大いなるわざわい

たいそう しんこう たま たれ ひと

なれども、太宗これを信仰し給いしかば、誰の人かこれを

背

そむきし。

しんごんしゅう もう だいにちきよう こんごうちようきよう そしつじきよう 依

真言宗と申すは、大日経・金剛頂経・蘇悉地経による。

だいにち きんぶ ごう げんそうこうてい おんとき ぜんむいさんぞう

これを大日の三部と号す。玄宗皇帝の御時、善無畏三蔵・

こんごうちさんぞう てんじく も きた げんそう そんちよう たも

金剛智三蔵、天竺より将ち来れり。玄宗これを尊重し給う

てんだい けごんとう 超 ほっそう さんろん すぐ おぼ

こと、天台・華嚴等にもこえたり。法相・三論にも勝れて思

ゆえ かんど だいにちきよう ほけきよう すぐ 思

しめすが故に、漢土はすべて大日経は法華経に勝るとおも

にほんこくとうせい てんだいしゅう しんごんしゅう おと

い、日本国当世にいたるまで、天台宗は真言宗に劣るな

りとおもう。彼の宗を学する東寺・天台の高僧等、慢過慢

か しゅう がく どうじ てんだい こうそうとう まんかまん
だいにちきよう ほけきよう

をおこす。ただし、大日経と法華経とこれをならべて、偏党

す み だいにちきよう ほたるび ほけきよう

を捨ててこれを見れば、大日経は萤火のごとく、法華経は

めいげつ しんごんしゅう しゅしよう てんだいしゅう にちりん

明月のごとく、真言宗は衆星のごとく、天台宗は日輪の

へんしゅう もの い なんじ しんごんしゅう じんぎ なら

ごとし。偏執の者云わく「汝いまだ真言宗の深義を習い

極 か むじん とが もう しんごんしゅう かんど

きわめずして、彼の無尽の科を申す。ただし、真言宗、漢土

わた ろつぴやくよねん にほん ひろ しひやくねん あいだ

に渡って六百余年、日本に弘まつて四百余年、この間の

にんし なん とう 粗々 知 でんぎようだいしいちにん

人師の難・答あらあらこれをしれり。伝教大師一人この

ほうもん こんげん 弁 たも どうせいにほんこくだいいち とが

法門の根源をわきまえ給う。しかるに、当世日本国第一の科

これなり。しょう勝をもつて劣れつと思ひ、劣をもつて勝しょうと思ふの故
だいもうここくに、大蒙古国を調伏する時、還ときつて襲かえわれんと欲す、これ
おそなり。

けごんしゅう華嚴宗と申すは、ほうぞうほっし法蔵法師が立つるところの宗なり。しゅう

そくてんこうごう則天皇后の御帰依ありしによりて、しよしゅうかた諸宗肩をならべがたかりき。

おうしかれば、王の威勢によりて宗の勝劣はありけり。法に
しょうれつ依つて勝劣はなきようなり。じんぎたとひ深義を得たる論師・
にんし人師なりというとも、おうぼう王法には勝ちがたきゆえに、かたまた

ま勝^かたんとせし仁^{じん}は大難^{だいなん}にあえり。いわゆる、師^し子^し尊^{そん}者^{じゃ}は

だんみらおう

くび は

だいばぼさつ げどう

檀^{だん}弥^み羅^ら王^{わう}のために頸^{くび}を刎^はねらる。提^{だい}婆^ば菩^ぼ薩^{さつ}は外^{がい}道^{どう}のために

さつがい

じく どうしよう そざん

なが ほうどうさんぞう かお

殺^{ころ}害^{がい}せらる。竺^{しやく}の道^{どう}生^{しょう}は蘇^そ山^{ざん}に流^{なが}され、法^{はふ}道^{どう}三^{さん}蔵^{ざう}は面^{めん}に

かなやき押

こうなん はな

火^{くわ}印^{いん}おされて江^{かう}南^{なん}に放^{はな}たれたり。

にちれん ほけきよう ぎようじや

そうりよ

し^しかるに、日^に蓮^{れん}は法^{はふ}華^{くわ}經^{きやう}の行^{かう}者^{じや}にもあらず、また僧^{そう}侶^{りよ}の

かず 入

よ ひと したが あみだぶつ

数^{かず}にもいらず。しかれども、世^よの人^{ひと}に随^{したが}つて阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}の

みようごう たも

あみだぶつ けしん 響 たも ぜんどう

名^な号^{ごう}を持^もちしほどこに、阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}の化^け身^{しん}とひびかせ給^{たま}う善^{ぜん}導^{どう}

おしように

じゆう すなわ じゆうしよう ひやく すなわ ひやくしよう ないし

和^わ尚^{しょう}云^{うん}わく「十^{じゆう}は即^{すなわ}ち十^{じゆう}生^{しょう}じ、百^{ひやく}は即^{すなわ}ち百^{ひやく}生^{しょう}ず乃^な至^し

せん なか ひと

せいしぼさつ けしん 仰 たも ほうねん

千^{せん}の中に一^{いつ}りも無^なし」。勢^{せい}至^し菩^ぼ薩^{さつ}の化^け身^{しん}とあおがれ給^{たま}う法^{はふ}然^{ぜん}

しようにん

しゃく

りようけん

い

まつだい

ねんぶつ

ほか

上人、この釈を料簡して云わく「末代に念仏の外の

ほけきようとう

まじ

ねんぶつ

せん

なか

ひと

な

法華経等を雑うる念仏においては、千の中に一りも無し。

いつこう

ねんぶつ

じゅう

すなわ

じゅうしよう

うんぬん

にほんこく

う

一向に念仏せば、十は即ち十生ず」云々。日本国の有

ち

むち

あお

ぎ

しん

いま

ごじゅうよねん

いちにん

うたが

智・無智、仰いでこの義を信じて今に五十余年、一人も疑

くわ

にちれん

しよにん

変

あみだぶつ

いを加えず。ただ日蓮の諸人にかわるころは、「阿弥陀仏

ほんがん

ごぎやく

ひぼうしようほう

のぞ

誓

の本願には『ただ五逆と誹謗正法とのみを除く』とちかい、

ほけきよう

ひとしん

きよう

きぼう

すなわ

法華経には『もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、則ち

いつさいせけん

ぶつしゆ

だん

ないし

ひと

みようじゅう

あびごく

一切世間の仏種を断ぜん乃至その人は命終して、阿鼻獄

い

と

ぜんどう

ほうねん

ほうぼう

もの

に入らん』と説かれたり。これ、善導・法然、謗法の者な

恃

あみだぶつ

捨

よぶつ

れば、たのむところの阿弥陀仏にすてられおわんぬ。余仏・

よきよう

われ

なげう

うえ

すく

たも

およ

余経においては、我と抛ちぬる上は救い給うべきに及ばず。

ほけきよう

もん

むけんじごくうたが

うんぬん

法華経の文のごときは、無間地獄疑いなし」と云々。しか

にほんこく

押

並

かれ

でし

だいなん

るを、日本国はおしなべて彼らが弟子たるあいだ、この大難

免

むじん

ひけい

巡

にちれん

怨

まぬかれがたし。無尽の秘計をめぐらして日蓮をあだむ、

これなり。

さきざき

しよなん

そうら

こぞくがつじゆうににち

ごかんき

前々の諸難はさておき候いぬ。去年九月十二日、御勘気

被

よ

こうふ

刎

をかぶりて、その夜のうちに頭をはねらるべきにてありし

かよの

くに

が、いかなることにやよりけん、彼の夜は延びて、この国に

きた 今 そろろう せけん 捨 ぶつぽう

来つていままで 候に、世間にもすてられ、仏法にもすて

てん 訪 にと 捨 者

られ、天にもとぶらわれず、二途にかけたるすてもものなり。

おんころざし おんつか 遣

しかるを、いかなる御志にてこれまで御使いをつかわ

おんみ いちご だいじ ひも ごついぜんだいさんねん ごくよう

し、御身には一期の大事たる悲母の御追善第三年の御供養

おく りようさんにち 現 覚

を送りつかわされたること、両三日はうつつともおぼえず。

か ほっしょうじ しゅぎよう 硫 黄 しま 年 来 使

彼の法勝寺の執行が、いおうが島にてとしごろつかいける

わらべ 会 こころち こころく えびす ようこう

童にあいたりし心地なり。胡国の夷・陽公といいしもの、

かんど 生 捕 きた みなみ い と 違

漢土にいけどられて北より南へ出でけるに、飛びちがいけ

かり み 歎 覚

る雁を見てなげきけんも、これにはしかじとおぼえたり。

ほけきよう

い

ぜんなんし

ぜんによん

われめつど

ただし、法華經に云わく「もし善男子・善女人、我滅度し

のち よ

いちにん

ほけきよう

ないしいつく

と

て後、能くひそかに一人のためにも、法華經の乃至一句を説

まさ し

ひと すなわ

によらい

つか

によらい

かば、当に知るべし、この人は則ち如来の使いにして、如来

つか

によらい

じ

ぎよう

とううんぬん

ほけきよう

いちじいつく

に遣わされて、如来の事を行ず」等云々。法華經を一字一句

とな

ひと

かた

もう

きようしゆしやくそん

おんつか

も唱え、また人にも語り申さんものは、教主釈尊の御使い

にちれん

いや

み

きようしゆしやくそん

なり。しかれば、日蓮、賤しき身なれども、教主釈尊の

ちよくせん

ちようだい

くに

きた

いちごん

謗

勅宣を頂戴してこの国に來れり。これを一言もそしらん

ひとびと

つみ

むけん

ひら

いちじいつく

くよう

ひと

むしゆ

ほとけ

人々は罪を無間に開き、一字一句も供養せん人は無数の仏

くよう

過

み

を供養するにもすぎたりと見えたり。

きようしゅ しやくそん

いちだい

きようしゅ

いつさい しゅじよう

どうし

教主釈尊は一代の教主、一切衆生の導師なり。

はちまんほうぞう

みなきんげん

じゅうにぶきよう

みなしんじつ

むりようおつこう

八万法蔵は皆金言、十二部経は皆真実なり。無量億劫より

このかたたも

たま

ふもうごかい

しよせん

いつさいきよう

以来持ち給いし不妄語戒の所詮は、一切経これなり。いず

うたが

そうそう

べつ

れも疑うべきにあらず。ただし、これは総相なり。別して

尋

によらい

こんく

しゅつたい

しようじよう

だいじよう

けん

たずぬれば、如来の金口より出来して、小乗・大乘、顕・

みつ ごんきよう

じつきよう

いま

ほけきよう

ほとけ

しようじき

密、権経・実経これあり。今この法華経は、仏、「正直に

ほうべん

す

とう

ないし

せそん

ほうひき

のち

かなら

まさ

方便を捨つ」等、乃至「世尊は法久しくして後、要ず当に

しんじつ

と

と たも

たれ

ひと

真実を説きたもうべし」と説き給うことなれば、誰の人か

うたが

たほうによらいししようみよう

くわ

しよぶつした

ぼんでん

疑うべきなれども、多宝如来証明を加え、諸仏舌を梵天

つ たも
に付け給う。

されば、この御経は、一部なれども三部なり、一句なれ

さんく

いちじ

さんじ

さんぶ

いっく

ほけきよう

いちじ

ども三句なり、一字なれども三字なり。この法華經の一字の

くどく

しゃか

たほう

じつぼう

しよぶつ

おんくどく

いちじ

納

たも

功德は、釈迦・多宝・十方の諸仏の御功德を一字におさめ給

によいほうしゅ

いっしゅ

ひやくしゅ

おな

う。たとえば如意宝珠のごとし。一珠も百珠も同じきこと

いっしゅ

むりよう

たから

ふ

ひやくしゅ

むじん

たから

なり。一珠も無量の宝を雨らす。百珠もまた無尽の宝あ

ひやくそう

す

いちがなんないしひやくがん

いちがん

り。たとえば、百草を抹って一丸乃至百丸となせり。一丸

ひやくがん

とも

やまい

じ

同

たと

たいかい

も百丸も、共に病を治することこれおなじ。譬えば、大海

いったい

しゆる

そな

いっかい

ばんる

あじ

の一滯も衆流を備え、一海も万流の味をもてるがごとし。

みようほうれんげきよう

もう

そうみよう

にじゅうはつぽん

もう

べつみよう

妙法蓮華經と申すは総名なり。二十八品と申すは別名

がっし

もう

てんじく

そうみよう

べつ

ごてんじく

なり。月支と申すは天竺の総名なり。別しては五天竺これ

にほん

もう

そうみよう

べつ

ろくじゅうろくしゅう

なり。日本と申すは総名なり。別しては六十六州これあ

によいほうしゅ

もう

しゃかぶつ

おんしやり

りゅうおう

たま

り。如意宝珠と申すは釈迦仏の御舍利なり。竜王これを給

ちようじよう

ちようだい

たいしやく

たも

たから

わって頂上に頂戴して、帝釈これを持って宝をふらす。

ほとけ

しんこつ

によいほうしゅ

むりようこうらい たも

仏の身骨の如意宝珠となれるは、無量劫来持つところの

だいかいみ

くん

ほね

染

いつさいしゅじよう

たま

大戒身に薰じて骨にそみ、一切衆生をたすくる珠となるな

いぬ

きば

とら

ほね

解

うお

ほね

う

いき

き

り。たとえば、犬の牙の虎の骨にとく、魚の骨の鷗の氣に消

ないし

しし

すじ

こと

げん

ひ

ゆるがごとし。乃至、師子の筋を琴の絃にかけてこれを弾け

ば、余の一切の獸の筋の絃、皆きらざるにやぶる。仏の

せつぼう よ いっさい けもの すじ げん みな切 破 ほとけ

説法をば師子吼と申す。乃至、法華經は師子吼の第一なり。

ほとけ さんじゆうにそう 備 たも いちいち そう みなひやくふくしようこん

仏には三十二相そなわり給う。一々の相、皆百福莊嚴

にくけい びやくごう もう か いん い はな くどく

なり。肉髻・白毫など申すは菓のごとし。因位の花の功德

とう な さんじゆうにそう そな たも ないし むけんちようそう もう

等と成つて三十二相を備え給う。乃至、無見頂相と申すは、

しゃかぶつ おんみ じようろく ちくじようげどう しゃくそん おんたけ 計

釈迦仏の御身は丈六なり。竹杖外道は釈尊の御長をはか

おんいただき みたてまつ おんいただき み

らず。御頂を見奉らんとせしに、御頂を見たてまつ

おうじぼさつ おんいただき み だいぼんてんのう

らず。応持菩薩も御頂を見たてまつらず。大梵天王も

おんいただき み 故 尋

御頂をば見たてまつらず。これはいかなるゆえぞとたず

ぬれば、父母・師匠・主君を、頂を地につけて恭敬し奉

りしゆえにこの相を感得せり。

乃至、梵音声と申すは仏の第一の相なり。小王・大王・

転輪王等、

この相を一分備えたるゆえに、この王の一言に、

国も破れ、国も治まるなり。宣旨と申すは、梵音声の一分

なり。万民の万言は一王の一言に及ばず。則ち三墳五典な

んど申すは、小王の御言なり。この小国を治め、乃至

大梵天王、三界の衆生を随うること、仏の大梵天王・

帝釈等をしたがえ給うことも、この梵音声なり。

ぼんのんじよう

いつさいきよう

な

いつさいしゆじよう

りやく

これらの梵音声、一切経と成つて一切衆生を利益す。

なか

ほけきよう

しやかによらい

おんこころざし

か

あらわ

その中に、法華経は、釈迦如来の御志を書き顕して、

おんじよう

もんじ

な

たも

ほとけ

みこころ

もんじ

そな

この音声文字を成し給う。仏の御心はこの文字に備わ

しゆし

なえ

くさ

いね

替

こころ

れり。たとえば、種子と苗と、草と稻とはかわれども、心

違

しやかぶつ

ほけきよう

もんじ

替

こころ

はたがわず。釈迦仏と法華経の文字とはかわれども、心は

ひと

ほけきよう

もんじ

はいけん

たま

一つなり。しかれば、法華経の文字を拝見せさせ給うは、

しょうじん

しやかによらい

会

思

生身の釈迦如来にあいまいらせたりとおぼしめすべし。

まゐろごし

さどのくに

送

遣

この志、佐渡国までおくりつかわされたること、すで

しやかぶつし

お

まこと

こうよう

せん

きようきよう

に釈迦仏知ろしめし畢わんぬ。実に孝養の詮なり。恐々

きんげん
謹言。

ぶんえいくねん

文永九年 月 日

しじょうさぶろうざえものじょうどのごへんじ

四条三郎左衛門尉殿御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押